

民族のいろいろと形



民族のこころと形

宮内庁三の丸尚蔵館

平成11年1月9日(土)ー3月14日(日)

目次

あいさつ	3
Foreword	4
図版	6
作品解説	30
出品リスト	37
List of Exhibits	38

凡例

- ・本図録は、平成11年1月9日(土)から3月14日(日)までを会期とする展覧会「民族のこころと形」の解説図録である。
- ・図録中の作品及び解説番号は、展示番号と一致する。
- ・図版ページに用いた各国の国名は現在の通称、作品解説及び出品リストには贈進当時の国名を記載した後に、()内に現国名を記した。
- ・作品解説及び出品リストに記載したサイズの単位はcmである。特に記さない限り、立体作品はD.(径または奥行)×W.(幅)×H.(高)で示し、絵画作品は本紙の縦×横で表示した。
- ・本展覧会の企画及び図録編集、展示作品に関わる調査は三の丸尚蔵館学芸室で行い、作品解説は学芸室主任研究官・菅居正史がNo.23、同・大熊敏之がNo.2, 8, 15～22, 24～27、研究員・太田彩がNo.1, 3～7, 9～14を担当執筆した。
- ・写真は、松野正雄(宮内庁嘱託、コニカ(株))の撮影による。

あいさつ

当館の多彩な収蔵品の中には、皇室が諸外国の様々な人々と交流される中で贈進を受けられた品々が含まれています。これらについては、その一部を「海を渡ってきた贈り物」展(平成8年)や「ヨーロッパの近代美術」展(平成9年)でも紹介してきましたが、今回は、とりわけその国の文化の伝統と現代感覚が融合した美しさを見せるアジアとアフリカ地域を中心に、ニュー・ジーランド、パナマ、ブルガリアを加えた15カ国の王族や元首から贈進された品々を紹介します。

東南アジアから西アジアにかけての地域は、西欧と中国、日本を結ぶ間に位置することもある、互いの影響を受けながら、独創的な文化を生み出した地域です。その意匠には仏教などの宗教的影響も大きく、多彩な花文様も見られます。また金工、漆工や木象嵌の技術にも、わが国の工芸技術との関連性が認められ、金属や木材の他、貴石、象牙、珊瑚や貝などの様々な素材を用いているのも、山岳と海洋のいずれにも恵まれた地域的な特色と言えるでしょう。

一方アフリカ地域の作品には、象牙や瓢箪、石などの自然な素材に、人々の生活や動物の意匠がおおらかに表現され、人間の根元である生命の力強さが感じとれます。そして、絵画作品を含め、そこには西欧近代美術の影響を受けながら、各国特有の絶えることのない文化的造形的特質が十分に息づいています。パナマやブルガリアの絵画作品にも、同様のことが言えます。

今回の展覧会で紹介する作品は、いずれもその国の文化を代表する作品として、元首等の贈進品に選ばれたものです。それぞれの国の民族に培われた文化の一端に接して頂くと共に、自国の文化を誇りに感じて大切にそのころにも触れて頂ければ幸いです。

平成11年1月

宮内庁三の丸尚蔵館

Foreword

Many gifts to the Imperial family received by various people of foreign countries are among the Sannomaru Shōzōkan collection. A few of them were introduced within the "Gifts from Abroad - The Shine of Gold and Silver" Exhibition (1996) and the "Modern Art of Europe - Reevaluation of Forgotten Works" Exhibition (1997), and this time we are introducing gifts from royal families or sovereigns of 15 countries, mainly of the Asian and African areas where the cultural traditions and contemporary sense show us a harmonious beauty, along with New Zealand, Panama, and Bulgaria.

Being positioned between western Europe and China or Japan, the regions from southeast to western Asia produced unique cultures influenced by these countries. Among their designs can be seen profound shades of religious colors such as of Buddhism, and also various floral patterns. Furthermore, metal, lacquer, and wooden inlay techniques show relations with our country's craft techniques, and the fact that various materials other than metal and wood are used such as precious stones, ivory, corral and shells is a regional characteristic of the areas blessed with both mountains and seas.

The works of the African areas show the strength of life which is the human source, within depictions of man's daily life and animals upon natural materials such as ivory, gourds, or stones. An eternal cultural and formative quality unique to each nation is quite alive, while being influenced by western Europe modern art, including paintings. The same thing can be said of paintings of Panama and Bulgaria.

The works introduced in this exhibition were all selected as gifts from sovereigns to represent their countries' cultures. We hope that you will be able to encounter the spirits cherishing and being proud of their own cultures, while viewing a fragment of these cultures cultivated by the peoples of each nation.

January 1999

Sannomaru Shōzōkan

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第20回 民族のこころと形)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	ティキ神像		一組		p. 6
2	河祭りの情景	ロドリゲス	一面	1963	p. 6
3	紅珊瑚製櫃		一点		p. 7
4	貝製食器・櫃		一具		p. 7
5	花文蒟醬水入れ		一对		p. 8
6	天人鳥獸花文洗顔具		一点		p. 9
7	舞踊仮面		二点		p. 9
8	シュエダゴン・パゴダ	ウ・バ・ニャン	一面	1944	p. 10
9	トオ(儀式用仮面)		一点		p. 11
10	草花文飾壺		一点		p. 12
11	孔雀置物		一对		p. 13
12	仏陀図浮彫宝石箱		一点		p. 14
13	木象嵌宝石箱		一点		p. 15
14	木象嵌刀剣箱		一点		p. 15
15	家族図染綿布		一点		p. 16
16	風俗図	マラバ	一点		p. 16
17	村人の語らい	ロビノ・イティラ	一点	1981	p. 17
18	樹林動物図彫瓢箪壺	G・マタンヴェ	一点		p. 18-19
19	”生命樹”浮彫	ビエール・アサンボ	一点	1967	p. 20-21
20	仮面	パタ・ドゥジョボコ	一点	1952	p. 22
21	女性仮面		一点		p. 22
22	狩猟舞踊図浮彫	バンギ彫刻家協会	一点	1967	p. 23
23	女性頭部像	パスカル・ルトンボ	一点	1978	p. 24
24	希望	タムシール・ゲイ	一面	1977	p. 25
25	楽園の鳥	ババ・イブラ・タル	一枚	1979	p. 26
26	ウアカー 古代土器	リカルト・マルチネス	一面	1980	p. 27
27	泉のかたわらで	ディミタル・カザコフ	一面		p. 28

图版





1 ティキ神像



3 紅珊瑚製櫃



4 貝製食器・櫃



5 花文蒔漆水入れ



5 [部分]



6 天人鳥獸花文洗顔具



7 舞踊仮面



8 ウ・バ・ニャン 《シュエダゴン・パゴダ》 1944年



9 トオ(儀式用仮面)



10 草花文飾壺





11 [対の姿]



12 仏陀図浮彫宝石箱



13 木象嵌宝石箱



14 木象嵌刀剣箱



15 家族図染綿布



20 パタ・ドゥジョボコ 仮面 1952年



21 女性仮面

22 バンギ彫刻家協会 狩猟舞踊図浮彫 1967年

26 リカルト・マルチネス 《ウアカー古代土器》 1980年

1 ティキ神像

(神像)玉石製、12.0×7.5

(箱)木製、25.2×11.4、H.5.0

ニュー・ジーランド

ハワイ諸島やニュー・ジーランド島などを含むポリネシア地域では、創世神話に登場する創造神の一つとして、また男性の人類始祖として、ティキ(Tiki)という男性神像を崇拜し、祭祀の対象としてきた。ニュー・ジーランドでも、この創造神は先住民マオリ人によって崇拜され、木や石の優れた彫刻技術と共に、その優れた造形美術が伝えられてきている。このティキ神像は、昭和31年(1956)6月にニュー・ジーランドの内閣総理大臣より贈進された品で、護符としてペンダントの形でも用いることができるものである。

神像は、顔をやや左斜めにして蹲踞する姿で表され、その素材には最高のものとされるグリーンストーン(緑色の貴石)を用いている点で貴重である。素材や制作技術から考えて、その制作年代はかなり遡ると思われるが、詳らかにし難い。

また神像の納入されている箱は、蓋表面にマオリ美術の特色である複雑な渦巻文様が施されている。これについて、贈進品に付属する説明書には、コルルという人面の文様と、古代の鳥人・マナイアが絡み合って表現され(それぞれの眼の部分に貝が嵌入されている)、そこに“太平洋を超えて結びあう手”が意図されていると記されている。広い太平洋を隔てた両国の友好を願っての贈進品なのである。

2 ロドリゲス

《河祭りの情景》

1963年

版(ミックスド・メディア)・紙

25.4×40.2

フィリピン共和国

本作は、昭和41年(1966)にフィリピン共和国のマルコス大統領夫妻から贈られたもので、祭りに美しく飾りつけられた船を中心に、小舟の上の人々が祝い合うさまを単純化された形象と幻想的な色調により表現している。伝来記録資料には、作品名とともに、本作がロドリゲス(Rodriguez)の手になるリトグラフ作品であり、作者が本作品によりリトグラフの展覧会で二等賞を得た旨が記されている。ただし、それが具体的には何のコンクール展のことを指し、開催年がいつであり、開催地がどこであったのかは明らかにされていない。また、本作での技法が単なるリトグラフのみの版ではなく、銅版を併用したものであることも注意される。しかし、いずれにしても、贈進当時のフィリピンの美術界で、国家元首の海外用贈進美術品作者に選定されるだけの地位を占めていた人物であることや、その主たる活動分野のひとつが版画であることを考え合わせると、おそらく、本作の制作者は、フィリピン戦後美術界の指導者のひとり、マニュエル・ロドリゲスなのではないかと推測される。

ロドリゲスは、1915年(1917年説もある。“ART Philippines” THE CRUCIBLE WORKSHOP 1992 Manila他)にセブ市に生まれ、1935年から39年にかけてフィリピン美術大学で学んだのち、はじめは水彩画、油彩画の分野で制作活動をすすめていった。その後、第二次世界大戦をへた1948年頃からシルクスクリーンの制作を手がけるようになり、58年にアメリカのシカゴで本格的にリトグラフ

と銅版画の技法を習得した。そして62年の帰国以降は、具象、抽象を問わず、油彩と各種版画の両分野で盛んな制作活動を展開して、しだいにモダニズムと詩情豊かな民族的形象を融和した独自の作風を確立、内外の美術コンクール展等で高い評価を得るようになった。

本作は、こうしたロドリゲスの1960年代の作風と合致した繊細かつ骨太な絵画世界をあらわしていることと、この頃から彼が試みるようになった、複数の版技法を併用するミックスド・メディアの手法を示していることから、ほぼ当作家の手によるものと考えられる。しかしながら、モチーフの扱い方がきわめて具象性の色濃いものであることや、本作の受賞記録が彼の公式の略歴(“CCP ENCYCLOPEDIA OF PHILIPPINE ART”他)に見当たらないこと、さらには、彼の長男であるマニュエル・ロドリゲス・ジュニア(1942—)も画家、版画家であり、本作制作年時の1963年には父と同傾向の制作方向を示した諸作を発表して内外で受賞を重ねていたことなどを考えると、本作が息子マニュエル・ジュニアの手になるものである可能性も否定し切れまいであろう。なお、本作贈進に関わるフィリピン本国での公式記録は見出せないとのことである。ちなみに、マニュエル・ジュニアの弟マルチェリノ(1946—)もまた、父や兄と同じく、画家、版画家として活躍している。

3 紅珊瑚製櫃

26.0×42.5、H.25.0

フィリピン共和国

美しい海洋に恵まれたフィリピン諸島周辺には、様々な珊瑚が豊富に生息し、古くより造形品の装飾素材として用いられてきた。本作品の素材となっている深い紅色の珊瑚は、その中でも貴重なものとして知られる。

櫃は、蓋が高く甲盛りとなり、長側面の片側を蝶番で止めて両短側面に金属製の持ち手を付けたいわゆる洋櫃である。器体表面を装飾する紅珊瑚は、平均的に1.0~1.5cm×5.0~6.0cm程度の大きさに薄く切断されて板状に成形され、それが段ごとに互い違いに隙間なく貼り合わされて、さらにその表面を透明な樹脂で保護している。珊瑚片の組み合わせは、大きさだけでなく、紅色の濃度や珊瑚の節などによる模様を効果的に利用して、表面全体に変化を与え、自然な珊瑚の美しさを十分に発揮したものである。

この作品は、昭和61年(1986)、フィリピン共和国副大統領からの贈進品である。

4 貝製食器・櫃

(食器)大19.3×19.4 H.1.7、小5.3×8.8 H.2.3

(櫃)30.8×55.2 H.33.2

フィリピン共和国

No.3と同様、海洋に恵まれた国ならではの品である。フィリピン海溝周辺では白蝶貝をはじめとして、内側に白銀色の光沢を発する美しい貝が多く産出し、古来より建物や調度の品々、装身具など、装飾の素材として盛んに用いられてきた。本作品は、貝の自然な姿を生かした食器と同素材による櫃で、このような食器は、宮殿で行われる晩餐会などでも使用されるらしい。昭和61年(1986)11月、国賓として来日したアキノ大統領より贈られた品である。

食器は、平皿10枚と、底に安定感を持たせるための加工を施したカップ形の器10個である。いずれも表面を滑らかに、美しく磨き上げ、周縁を平滑に整えただけで、貝の持つ自然な形と美しさを利用してはいる。

櫃は、やはりNo.3と同じく甲盛りの洋櫃形で、表面を滑らかに仕上げ、ほぼ1.3×2.6cmの大きさに裁断した貝片を器体に貼り合わせて装飾している。その貼り合わせは、蓋や側面の縁は輪郭を作るように一列とし、その中は籠の編み目のようになっており、波文様を表しているようでもある。このジグザグな貼り合わせ方によって、貝の光沢角度が異なって、櫃をどの角度から見ても美しく見えるように仕上げられている。

5 花文蒟醬水入れ 一对

各総高58.5 上部鉢口径62.0 下部受台底径37.4
旧シャム(タイ王国)

漆は日本、中国、朝鮮、ベトナム、カンボジア、タイ、ビルマなど、アジアの広い地域にわたって生育し、その樹液は工芸技術に用いられ、各国でそれぞれに発達してきた。そのうちタイでは、箔絵や螺鈿の技法のほか、竹を素材として籠状に編み上げた素地(籃胎)に、漆を塗って器を作ること—いわゆる籃胎漆器—が盛んである。この漆器は、この地域で豊富な材料である竹と、漆が日本の漆よりも弾力性があるという特性を生かしたものである。そしてその加飾には、蒟醬と呼ばれる技法が用いられている。

蒟醬は、黒漆塗の面に文様を彫り、そこに朱漆を充填し、さらに漆を塗って文様を研ぎ出す技法で、充填して文様を表す漆に、金箔や他の彩漆を用いるものもある。タイにおいては、前者がチェンマイ市周辺で行われる伝統的なもので、色彩豊かな後者は、現在主流となっているミャンマー様式のものである。

本作品は、昭和7年(1932)に来日したシャムのカンペンペット王子より贈られたもので、蒟醬製品としては大型の水入れである。受台の上に鉢を置き据える形式で、黒漆地に朱漆で全面に花の文様を表した、伝統的な蒟醬技法によるものである。花文は、中に蕾や葉茎を表して丸く大きく開いた花文を互い違いに配して、その周辺にも大小の花蕾や葉茎を大きくうねらせたもので、おおらかでありながらしっかりと彫刻された文様が、黒と朱の対比でより効果的に、鮮やかに表現されている。文様の大きさの違いが顕著な点には、むしろ手作りの良さが出ている。

なお蒟醬の技法は、中国では古くに用いられていた填漆と呼ばれるもので、またわが国でも、室町時代頃からの遺品に見られ、茶道具では唐物名物として珍重されていた。また、現在でも香川ではこの技法による作品が制作されており、文様や色彩などの相違はあるにせよ、同様の技法がアジア文化圏に広く見られることは興味深い。

6 天人鳥獣花文洗顔具

総高14.8 洗面器口径14.5 受台底径9.5
タイ王国

タイの特色ある工芸技術の一つに、ニエロ(niello)という金工技術がある。ニエロは、本来、オリエントやヨーロッパで発達した金工の装飾技法で、金属面に彫られた凹部に、銀・銅・鉛・硫黄など

からなる黒色合金を粉末状にしたものを象嵌して文様を表すことで装飾するものである。タイでは、17世紀頃にはこの技法が発達しており、タイ文化と融合して特有の文様を表すなどの発達を遂げて、現在に至っている。

この品は、おそらくは儀式の時などに清水を入れて用いる小型の洗顔具で、洗面器と受台からなる。銀を薄く叩き伸ばして成形し、外側表面はニエロ技法によって、タイ文化で育まれた文様が表されている。文様は、器全体にわが国で言うなら宝相華に類する花文様がアレンジされ、その中に蝶・栗鼠・鳥の鳥獣と、天人(あるいは菩薩)が配されるもので、浄土をイメージした仏教的な図様である。文様には葉脈や羽などに細かい毛彫りが施され、実に丁寧仕上げられている。黒と金の明快な色彩対比と、華やかな文様表現がうまく融合して、気品ある品となっている。

本作品は、昭和38年(1963)にタイ王国首相夫人より贈進された品である。

7 舞踊仮面

(トッサカン王仮面)全高約62.0
(シーダ姫冠)全高約50.0
タイ王国

タイの伝統舞踊は、色鮮やかな衣装、金色に輝く仮面、独特の踊りで人々を魅了し、国を代表する文化遺産としてよく知られている。この舞踊を代表するものに、ラッタナコーシン王朝の第一代目の王・ラーマI世(在位1782~1809)の時代に、インドの古代叙事詩「ラーマヤナ」物語をタイ式に翻案したタイ文学の最高傑作「ラーマキエン」を題材とした仮面舞踊劇がある。主人公ラーマ王子とその妻シーダ姫の物語で、彼らの言葉や動作は人間としての理想であり、あこがれの対象として、広く国民に親しまれている。

この二点は、同物語に登場するシーダ姫をさらう魔王トッサカンの仮面と、シーダ姫の冠である。仮面は、粘土で作って焼き上げた原型に紙を何重にも貼り重ねて成形したものの上に、シーフーンとよばれる胡粉を塗り、さらにその上全面に金泥を施して、きらびやかな装飾には硝子を用い、魔王トッサカンの顔貌の表情は彩色のほか、歯に貝、牙に角を用いている。舞踊に実際に使用するものとは多少相違があることから、鑑賞用あるいは装飾用に製作されたものと考えられる。

昭和52年(1977)、タイ王国首相夫妻より贈られたもので、タイの宮廷美を象徴するに相応しい、華麗な贈進品である。

8 ウ・バ・ニャン

《シュエダゴン・パゴダ》
1944年
油彩・カンヴァス
95.0×78.5
旧ビルマ(ミャンマー連邦)

本作は、昭和19年(1944)に「ビルマ國國家代表ウ・バー・モウ閣下」来日の折に、「國內ノ絶對ノ人氣ヲ得」ている当時のビルマ美術界第一人者の作として贈進されたもので、ビルマの象徴となっている建造物シュエダゴン・パゴダ(塔)をモチーフとしている。

作者のウ・バ・ニャンは1897年に生まれ、ビルマ国内でイギリス人教師らから美術教育を受けたのち、1930年代頃にロンドンに留学して本格的に西欧近代の絵画描法を学んだ油彩、水彩画家で、今日ではミャンマー近代美術の開拓者のひとりとして評価づけられている。その作風は、本作にみられるように、アカデミックな写実描法を基礎としつつ、対象にそなわる実在感を光と陰の対比のなかで骨太にとらえる重厚なものであり、ことに肖像画、人物画の分野で優れた技量を発揮した。また、美術教育にも尽力し、1942年からは、ヤンゴンの美術アカデミーの校長をつとめた。1945年に死去。

9 トオ(儀式用仮面)

顔部27.0×27.0 H.16.5

ブータン王国

ブータンは、今なお、生活のあらゆる面に仏教の影響が色濃く反映された特色ある文化を伝えている。仏教の開祖・釈迦への信仰はもちろんであるが、ブータンでは、8世紀後半に密教系の仏教を伝えるのに大きく貢献した高僧・パドマサンバヴァ(グル・リンポチュエの名で親しまれている)が、数多くの人々に崇拜されて親しまれている。とりわけ、このグル・リンポチュエの生涯を12の重要な出来事に要約し、それらの出来事は1年12ヶ月の各月の10日に起こったとして、各月の10日(10日を‘ツェチュ’という)頃にツェチュ祭と呼ばれる華やかな法要儀式が行われる。このツェチュ祭にはグル・リンポチュエが様々な姿に変化して来降するといわれ、人々が身近に師を拝むことが出来る機会でもある。

この法要の際に必ず行われるのが、チャムと呼ばれる仮面舞踊で、骸骨や悪霊、動物や美男美女など、様々な特異な表情をした色彩豊かな仮面や衣装をまとうて、躍動的に仮面劇を展開する。この舞踊は密教の教義に裏付けられたもので、難解な法要の内容を舞踊によって具象的に人々に見せるという意味がある。従って、密教教義の上で鬼神を調伏する役割を担う多くの忿怒尊が活躍する。

この仮面はその忿怒尊の代表的な仮面で、トオと呼ばれる。三つ目をかっと見開き、口を大きく開けて牙を突き出して顔全体の筋肉を隆起させ、眉や髭は火炎と化し、髑髏の頭冠をつけた表情は、グル・リンポチュエの一つの変化した姿でもあり、威厳さえ感じる。原型にあわせて紙粘土で成形した上に彩色をして透明塗料(ワニスか)で仕上げ、頭髪をフェルト、飾りを六色の龍文綾の裂で装飾している。昭和61年(1986)にジグメ・シンゲ・ワンチュク国王より贈られた品で、装飾用に製作された品と考えられるが、秘境の地と言われるブータンを身近に感じることで出来る品である。

10 草花文飾壺

総高43.5 胴径16.5 底径8.7

インド

もともと仏教文化が華開いたインドは、8世紀頃から西方よりイスラム教の影響を受け始めた。16世紀のムガル朝の時期にその美術は頂点に達し、タージ・マハルに代表される美しいイスラム建築や、ミニアチュール(細密画)などが制作され、その影響は以後もインドーイスラム美術として存続している。

本作品は、形、文様、製作技術にその伝統が表れた優美な造形作

品である。器体は木材で成形し、蓋などの内側の一部に金属板を付し、外側は象牙と金線を象嵌して文様を表すビドゥリー(Bidri)と呼ばれる金工象嵌技法を用いて仕上げている。頸部から胴部の象牙文様は、金線で枠取られた中に、ごく薄い象牙を花や葉、茎の形に切り取ったものを嵌め込んでおり、文様の象牙の色は白色、乳白色などの自然な違いを利用して色彩感が表われて表情豊かなものになっている。瓶の首を長く作っている点、蓋の形がイスラム建築の建物の形をしている点、瓶の上下などを蓮弁で飾っている点、そして細い葉茎で繋がる小花をアレンジした意匠を用いている点も、イスラム美術の影響である。インドーイスラム美術の伝統的装飾技術を用いて、洗練された意匠を細部まで丁寧に仕上げた優品である。

昭和60年(1985)にインドのガンジー首相より贈られた品で、気品ある優美な造形が贈進品として選ばれた理由であろう。

11 孔雀置物 一对

各総高49.5

ネパール王国

孔雀は、洋の東西を問わず、その羽を広げた美しく華麗な姿から、太陽、平和、繁栄などのシンボルとして、様々な装飾に取り入れられてきた。また仏教では、毒虫や蛇を食べることから、息災(災難や病魔などの災い)を祈る場合にそれを守護するものとして経典に説かれ、また孔雀明王として崇められる対象ともなっている。

釈迦誕生地のルンビニーのあるネパールは、仏教やヒンドゥー教による文化が中心で、その様子は建物や儀礼など、人々の生活にも顕著に現れている。その中で孔雀は、見事に彫刻で今も建物の装飾に見られるなど、ネパールでもその姿は仏を荘厳するものとしてとらえられているのである。

本作品は、四側面に化仏宝冠をつけて錫杖・蓮華・羂索・玉環の持物を手にした四臂の変化観音を表した台座に、玉をくわえた孔雀を置くもので、対であることや、華麗な装飾から、ヒンドゥー教の影響を受けて制作された装飾用の置物であろう。孔雀は、おそらく銅を主体とした合金を鑄造して鍍金したもので、首と頭部、胴部、尾羽などの各部分をそれぞれに鑄造して接合、あるいははめ込みとなっている。孔雀の眼にはルビーを嵌め込み、表面全体は金線、珊瑚、トルコ石などの貴石で、華麗な装飾を施している。台座の変化観音も同様の装飾で、その緻密な金工技術は、ネパールの優れた金工技術の伝統を窺わせる品である。

この置物は、昭和35年(1960)に国賓として来日したネパール王国のマヘンドラ国王とラトナ王妃より贈られた品である。金線を用いた精緻な技術、貴石類をふんだんに用いている点、金属の変色のほか、珊瑚や貴石の嵌め込みには、本来のものがはずれて色付けした練物が補修されたり、台座の金属の一部取り替えが認められることなどから、その制作は古くは19世紀頃まで遡るかと考えられる。

12 仏陀図浮彫宝石箱

9.5×14.9 H.5.2

ネパール王国

ネパールの工芸技術は、No.11に見られるような金工技術のほか、仏像彫刻が盛んであったこともあって、木や石などの彫刻技術も優

れている。本品は象牙を素材に、その彫刻技術を生かした品である。贈進はNo.11と同時期、国王からのものである。

蓋表の彫刻は、釈迦が菩提樹の下で瞑想に入った時に、それを阻もうと近づく魔物の魔力を克服して悟りを開いたという、‘降魔成道’と呼ばれる釈迦の奇蹟の場面を主題としている。釈迦は蓮華座の上に坐し、右掌を伸ばして大地に触れる印相(手の形、触地印という)で表され、その左右から魔力を象徴する龍が炎を吐きながら襲いかかる。側面には、仏堂や菩提樹などを連続させて装飾している。いずれも厚3~4mmの薄い板状の象牙に図様を丁寧に彫り出して、鋸で打ち留めて箱に仕立てている。宝石を入れるための箱の装飾意匠に釈迦の奇蹟の一場面を用いるのも、仏教文化が根づいているネパールらしい品である。

13 木象嵌宝石箱

20.0×29.3 H.7.5

シリア・アラブ共和国

西アジアの文化は、古くより西のギリシャやローマ、エジプトなどからの影響を強く受けて発達し、またそれらがさらに東へ伝播していく起点ともなっていた。そのため、そこでは様々な工芸技術が発達し、シルクロードを通じて伝わった遠くわが国の工芸技術と類似するものも少なくない。正倉院宝物の技法や意匠を語る時、必ず西アジアの作品との関連が説明されるのもそのためである。

その中の一つに、木象嵌の技術がある。現在もイランを中心に、伝統芸術の一つとしてその技術は護られ、精巧な作品が作られている。同じイラン文化圏内のシリア・アラブでも、この優れた木象嵌技術を習得した技術者によって、三角形や四角形、ジグザグなどを組み合わせた幾何学文様を表すことを特色とした装飾が盛んに行われている。

この作品は、昭和60年(1985)にシリア・アラブ共和国のアサド大統領夫妻より贈進された品で、やや大きめの宝石箱である。蓋表の四隅に貝を嵌入する他は、数種類の木材を、茶や黒の自然の色を生かすか、または赤・黄・緑に染めたものと、骨(ラクダ骨)を用いている。製法は、素材を一辺1.5~2.0mm程度の三角形や四角形の棒状にし、それらを色彩などを考慮しながら数本接合し、三角形や六角形などの断面をもつ棒を作る。それを2.0~3.0mm程度の厚さに木口より挽くと、それぞれの形をした文様片が多数でき、それを器体に巧みに貼り合わせるという方法である。この宝石箱は文様構成や配色が良く配慮され、丁寧な手業で仕上げられた品である。首都ダマスカスで購入されたものであることから、同国内で制作されたものであろう。

14 木象嵌刀剣箱

26.5×114.8 H.8.0

OPEC[石油輸出機構]

No.13と同様、木象嵌技法で装飾したものである。この作品は、蓋表のジグザグ文が単一的になりがちな幾何学文の構成に変化を与えている点が特色であろう。素材は、やはり貝を部分的に嵌め込み、他はNo.13とほぼ同じで、象牙が加わっている。文様や色彩感に、優れたデザイン力を感じることが出来る。

この箱は、昭和54年(1979)に、中に納められる刀剣と共に、当時の石油輸出機構議長より贈進された品である。西アジアの工芸技術を代表するものとして、木象嵌によって装飾される技術が選ばれ、その製作地もイラン周辺なのであろうが、それらの詳細は不明である。

15 家族図染綿布

蠟染染・綿布

73.0×76.0

タンザニア連合共和国

本作は、野外で日常の仕事にいそしむ一家の姿を中心的なモチーフとして、その周囲にタンザニアの伝統的な各種文様をバランスよく配した染織作品で、当初から木枠張りの形状で伝えられている。騰染の技法を巧みに生かしているが、こうした蠟を防染剤とする染めの手法は19世紀にオランダやイギリスからアフリカに伝えられ、今日ではタンザニアなどの東アフリカ地域よりも、むしろ西アフリカ諸国でひろく用いられているものである。

タンザニアの美術というと、一般にはティンガティンガと呼ばれる民衆絵画や、伝統的な木彫技法を基礎としつつも、モチーフを適度に抽象化した現代的な造型感覚を特色とするコマンデ彫刻がよく知られている。また近年は、ダルエスサラーム大学芸術学部を主要な本拠地として展開する現代絵画作家の活動も紹介されるようになった。しかし、それらとともに見逃すことができないのが、ダルエスサラーム市内に設置されているニユンバヤサナア(Nyum Ba Ya Sanaa「芸術の家」)の存在であろう。同所は、絵画のほか木工、染色、紙工などの主として外国人観光客向けのスヴニール・アートを製作販売する工房の複合施設で、その作業現場は見学者にも公開されているという(川口幸也「美術をこえて—アフリカ造型美術の現在」『世田谷美術館紀要』第2号 1992)。

本作には、特定の工人名を示すサインは記されておらず、製作地を伝える資料も添えられていない。しかし、その作風から判断する限りでは、おそらくはこのニユンバヤサナアで製作された一点ではないかと推察される。なぜならば、全体の意匠は一見するといかにも伝統的かつ民族色豊かなものに映るが、こうした構図の製品はタンザニア国内の一般市民向けとはいえず、土俗的なアフリカらしさの一方で、洗練された作風をも期待する外国人の趣向にこそかなう性格のものといえるからである。

昭和56年(1981)3月に訪日したタンザニア連合共和国のジュリアス・カンバラゲ・ニエレレ大統領夫妻からNo.16~18とともに贈られた。

16 マラバ 風俗図

版・紙

40.0×46.7

タンザニア連合共和国

ヒョウタン製の鉢、もしくはタンザニアでは日常的に使用されている中国製の金ダライを頭上に置くマーケット・マミー(物売の女性)の姿を画面中央に大きくあらわし、その周囲には、さまざまな

表情をみせる街の人々や、各種の動物が描き配されている。一見、プリミティブな作画法と形態把握のように感じられるが、よくみると、その軽妙な対象描写と巧みな画面構成には手慣れた技がうかがわれる。その適度に洗練された造形的手法が基本的には前掲のNo.15と同一のものであることから、本作もまた、ニュンバヤサナアに所属する作家の手によるものと考えられる。

No.15、17～18の作とともに、昭和56年(1981)にニエレレ大統領夫妻から贈進されている。

17 ロビノ・イティラ 《村人の語り》

1981年

チョーク、チャコール・布

53.2×60.0

タンザニア連合共和国

ニエレレ大統領夫妻から贈進された一点。粗織りの布地を支持体として、褐色系のチョークや黒色チャコールを用いて描かれた作品で、画面裏には、作品名、作者名、制作年とともに、作者がニュンバヤサナアに所属する画家であることが記されている。あくまでも西欧風の写実的対象描写を基本としつつも、プリミティブなデフォルメを適度に加えた形態把握が抑制された民族色を画面にもたらししており、いかにも外国人に受け入れられやすい、演出されたアフリカン・イメージを生みだしている。その制作方向は、ダルエスサラーム大学を本拠地とする、西欧風の造型技法を中心とした美術教育を受けた“アカデミズム”の画家たちの作風とも、自由な創造力の解放を旨とするティンガティンガ絵画のありかたとも異なる、高級スヴェニール・アート生産を目的としたニュンバヤサナア絵画の理念を端的に示しているといえよう。

18 G. マタンヴェ 樹林動物図彫瓢筆壺

瓢筆・染、浮彫

D.34.0×H.33.0

タンザニア連合共和国

アフリカ各地にひろく分布するヒョウタンは、古くからさまざまなかたちで加工され、什器をはじめとする日常用品や楽器などの素材として利用されてきた。その加飾方法は、本作のように植物等の染料で器体表面を着色したのちに文様を削りだすのが一般的であるが、そのほかに焼刻の技法もよく用いられている。

本作は、ヒョウタンの球状胴部全面にキリンやゾウをはじめとする各種の樹林帯に生息する野性動物の姿を生き生きと刻みだし、器体首部には幾何学文をあしらった、きわめて装飾性の豊かな一点である。その絵画的な意匠や優れて洗練された彫技、器体下部に工人のサインが刻み記されていることなどから、やはりニュンバヤサナアで製作されたものと考えられる。

昭和56年(1981)にニエレレ大統領夫妻よりNo.15～17とともに贈進された。

19 ピエール・アサンボ “生命樹”浮彫

1967年

牙彫、木彫

D.15.0×H.39.0

旧コンゴ共和国(コンゴ民主共和国)

アフリカでは森林地域を中心に、古くから象牙の加工生産品が生みだされてきた。ことにコンゴでの象牙細工は盛んであり、ポルトガルの植民地となっていた16世紀頃には、欧州向けの什器や小物、楽器などが数多く製作、輸出されていたという(ミシェル・レーリス、ジャクリーヌ・ドランジュ『人類の美術 黒人アフリカの美術』1967/邦訳：岡谷公二訳 新潮社 1968)。

本作は、こうしたコンゴでの優れた象牙細工の伝統を受け継いで製作されたもので、象牙の根本から中ほどまでの部分を用いた中空の本体と黒檀の台座を組み合わせることで全体がかたちづくられている。台座の周囲には樹根が深くからみながら大地に根ざすさまが彫り込まれ、その上部に位置する本体部分には、下方から上方に向かって近景から中景、遠景にいたるという遠近法に基づいて、数多くの男女が愛を交わし、あるいは日々の労働にいそしみ、憩いの時を過ごすという生の営みのさまざまな姿が生き生きとした躍動感をもって彫りあらわされている。いわば本作は、全体として“生命樹”を造型化したものといえるが、あるいはここには、コンゴに伝わる何らかの神話的伝承譚が主題として投影されているのかもしれない。彫技は細部にいたるまで精緻をきわめた丹念なものであり、とりわけ象牙そのものにそなわる根本の部分から牙先端に向かってしだいに厚みが薄くなっていくという素材の特性を巧みに生かして、各場面での重なり、遠近感を彫りの深浅により表現する技量は見事である。象牙根本部に「1967 © ASIMBO PIERRE RIHAD-EFF ECOLE」という、制作年と作者名を示す銘が彫り記されている。

昭和46年(1971)6月の訪日の折の、コンゴ共和国のジョゼフ・デジレ・モブツ大統領夫妻からの贈進品。

20 パタ・ドウジョボコ 仮面

1952年

木彫

D.15.0×H.34.0

中央アフリカ共和国

中央アフリカの国立バルテレミ・ボガンダ博物館美術・文化部からの調査報告文書に従えば、本作は、1965年春に同国南部のノラ地域で実施された科学調査の折に、製作者の息子であるカカ人住民から調査団のメンバーが直接購入したものであるという。ゴムの木を素材として、顔の上下におのおの2本の突起を、両頬脇には溝を刻んだ板状の耳もしくは飾りを張りだし、さらに口唇下部にも突起をそなえた、菌をむきだしにする人面がかたちづくられている。また、額と頬には、それぞれ瘡痕文身と思われる装飾が施されているが、こうした顔面装飾は、カカ人の間では、儀式舞踏やかがり火の回りでの子供たちへの夜語りの際に、人々に怖れを抱かせるために施されるものであると伝えられている。なお、大阪の国立民族学博

物館の吉田憲司氏によると、本作の様式そのものは、西アフリカのコートジボアール北部の民族・セヌフォ人の仮面との関連性がうかがえるとのことである。

昭和43年(1968)の中央アフリカ共和国親善使節団来日時に、ジャン・ベデル・ボカサ大統領からの贈進品として、No.21、22とともに届けられた。

21 女性仮面

木彫・彩色

D.17.0×H.32.0

中央アフリカ共和国

コクンボと呼ばれる白色の木材を彩色して製作された仮面で、1966年に実施された中央アフリカ南東部ウアンゴ市のヤコマ人に対する科学調査時に、調査団のメンバーが取得したとの伝来が残されている。頭頂部に髻を結び、額には菱形を組み合わせた癩痕文身と思われる装飾を施した女性の顔面がかたどられている。国立バルテレミ・ボガンダ博物館からの報告文書によれば、女性が成人になる通過儀礼の際に施術者がかぶり、儀礼後には、被施術者である新成人女性の家の中に“聡明”の印として飾られるとのこと、細い目と物言いたげな唇、そして長めの鼻の形状は、全体として神聖・証・純粹を意味しているという。ちなみに、吉田憲司氏の所見では、本作の様式は、ガボンのプヌ人やシラ人の製作する仮面をモデルにして生みだされたものと思われるという。なお、前記No.20や本作のように、「アフリカにおいては、共同体内部での儀礼に用いる仮面と観光客向けに作られる仮面とを問わず、他の民族の仮面からの様式の借用や、他の民族の仮面そのものの導入といったことは、頻繁にみられる。また、観光客向けの仮面については、アフリカ大陸全域にまたがる巨大な販売のネットワークが作り上げられているようである。したがって、中央アフリカの仮面に、遠く離れた他の地域の仮面との関連がうかがえるのは、けっして不思議なことではない」との指摘が吉田氏からなされている。

前記No.20と後述No.22の二作とともに贈進された。

22 バンギ彫刻家協会

狩猟舞踊図浮彫

1967年

牙彫

D.25.4×H.40.2

中央アフリカ共和国

国立バルテレミ・ボガンダ博物館から寄せられた調査報告文書によると、本作は、中央アフリカのロバイエ県在住民族のングバカ人が日常用いている、ヌザギと呼ばれる産物運搬用背負い籠の形状を模したものだということ。と同時に、本作にみられるような、根本から中ほど位までの間で短く切った形状の象牙やそれに類した他の材質の器物は、現地では棕櫚酒を飲む時の杯として使用されているとのことである。全体に編み目の透かし彫りを施した器体上部には、そのことを示すかのように棕櫚のモチーフが浮き彫りにされ、下部には、草葎きの民家、狩人の姿、踊る人々が刻みあらわされている。ングバカ人はボカサ大統領ゆかりの民族との事で、おそらくは、ン

グバカ人をはじめとする森林地帯に暮らす民族の生活のありかたを讃える意味で、このようなモチーフが選ばれたのであろう。

制作をおこなったバンギ彫刻家協会よりボカサ大統領に献上されたのち、昭和43年(1968)にNo.20、21とともに贈進されている。

23 パスカル・ルトンボ

女性頭部像

1978年

石彫

26.0×16.0×22.5

ガボン共和国

この彫刻は、ガボンの女性美の典型的なイメージを表したものである。伝統的な彫刻技術により滑らかな石の特性を生かして、はちきれんばかりの若さと清楚な表情を彫りだしている。後頭部にまとめた頭髪が特徴であり、白色の彩色が施されている。

この作品の素材は、ガボン南部ンゲニエ地方のンビグでしか採石されない石を用いている。このンビグ石による彫刻は、特定の部族が伝統的な技術と道具によって古くから造ってきた歴史があり、その作品はガボン全土はもとより、アフリカ中、その他でもよく知られているという。ンビグ石の彫刻家は、採石地のンゲニエ地方に住むものと首都リーブルヴィルのアリバンデンという地区で共同生活をするものに分かれる。作者パスカル・ルトンボはこの共同生活者のひとりと考えられる。

昭和53年(1978)、ガボン共和国のエル・アッジ・オマール・ボンゴ大統領から贈進された。

24 タムシール・ゲイ

《希望》

1977年

油彩・カンヴァス

117.0×79.5

セネガル共和国

1960年に独立国として新たな道を歩みはじめたセネガルで、詩人でもある初代大統領レオポルド・セダール・サンゴールが掲げた建国理念とは、伝統的なアフリカ固有の精神性と西欧近代的な物質文明主義を融和して、真に新たなセネガル文化を生み出していこうというものであった。その理想を現実のものとするべく、同国では建国直後から強大な文化政策が推しすすめられ、1960年代から70年代前半にかけて、国立の芸術教育機関の充実をはじめとして、美術館や劇場、装飾美術工房の設置、セネガル美術の世界に向けての積極的な紹介プロジェクト等が次々と実行されていった。ことに美術の分野では、独立直後にフランス留学から帰国したパパ・イブラ・タル(No.25)らの指導者のもとで、フォーヴィスムやキュビズムの絵画技法を基礎としつつ、アフリカの伝統的民族なモチーフを半具象様式で表現するという制作方向が国民国家文化の実践として確立されていくことになる。

1953年に生まれたタムシール・ゲイは、こうした国民美術文化創出期に国立美術学校で美術教育を受けて、1970年代前半から本格的な制作活動をはじめた画家、版画家のひとりで、日本では昭和

57年(1982)に開催された<セネガル現代美術展>(ラフォーレミュージアム)で、1979年に制作された、点描の効果を生かした半具象様式のシュルレアリスム風油彩作品二点が紹介されている。本作《希望》は、それに先立つ77年に描かれたもので、キュビズム風の明快な形象把握を特色とする、比較的初期の作風を示す一作である。サンゴール大統領から昭和天皇に送られた1978年のニュー・イヤール・カードにゲイの半具象の作品が印刷掲載されており、その作風に天皇が関心を示された旨がサンゴール大統領に伝わったのがきっかけとなって、このゲイの新作が昭和53年(1978)に贈進されることになったとの伝来が残されている。

25 パパ・イブラ・タル

《楽園の鳥》

[制作]セネガル装飾芸術工房

1979年

染織

191.0×160.0

セネガル共和国

本作は、セネガル装飾芸術工房のディレクターをつとめているパパ・イブラ・タル自身の原画によるタペスリーで、セネガルに伝承されている楽園に住む鳥の姿をモチーフとしている。昭和54年(1979)にサンゴール大統領夫妻より贈進された。

セネガル近現代美術の指導者のひとりパパ・イブラ・タルは、1935年にセネガルのチパウアーンに生まれ、54年から59年にかけてフランスに留学して、建築や美術、美術教育学等を学んでいる。そのタルが独立直後の母国に帰国して携わったのは、制作や教育の指導ばかりではなく、海外輸出向けの商品としての装飾美術品の創出という事業企画もまた、彼の重要な課題であった。その具体的な実践例のひとつとして挙げられるのが、1961年のタペスリー工房設立であり、同工房はその後、セネガル装飾芸術工房へと拡充されていった。同所では、セネガルの画家による原画により、織職人が主に欧州から輸入した糸を用いてタペスリーを制作しているという(No.15掲出川口文献他)。その鮮烈な色彩感覚とダイナミックな半具象や抽象的図様は欧州を中心に好評を得ているとのことで、商品としてばかりではなく、しばしば同国から海外元首等への贈進品としても用いられているようである。

26 リカルト・マルチネス

《ウアカー古代土器》

1980年

パステル・紙

46.8×62.0

パナマ共和国

本作のモチーフとなっているウアカーとは、パナマのインディオの墓から出土する遺品のことである。一般には、金や銀製の装飾品の出土例がよく知られているが、そのほかには、土器等の日用品が多く発掘されているという。本作に添えられた文書記録によれば、ここで描かれているのは、時代の異なる6、12、13世紀それぞれの様式を示す三点の壺である。

作者のマルチネスは、1953年に生まれ、パナマ大学で建築を学んだほか、国立美術学校等で彫刻や絵画、版画の各造型技法を習得した。その後、1967年から内外のさまざまな展覧会を舞台に制作活動を展開する一方、73年以降は美術教育にも力を注いで後進を育成している。その作風は、1980年代前後には、本作にみられるように写実性のなかに素朴な民族的情趣を漂わせたものであったが、在京パナマ大使館より提供された近年の出品展覧会資料での掲載図版をみる限りでは、90年代に入ると、主に現代パナマ風俗や人物像、静物をモチーフとした、力動感あふれるタッチと鮮やかな色彩を特色とする一種未来派風のものへと変転しているようである。

昭和55年(1980)にアリストティデス・ロヨ・サンチェス大統領夫人から贈進された。

27 デイミタル・カザコフ

《泉のかたわらで》

油彩・カンヴァス

128.5×128.5

旧ブルガリア人民共和国(ブルガリア共和国)

中世、ヴィザンティン風のプリミティヴな形態把握を基本としつつ、キリスト教と東欧の民族的な世界観を混在させたような一種神話風の情景を、計算された配色構成と戦後シュルレアリスム風の動的構図、抒情的なタッチにより表現した作品である。

作者のデイミタル・カザコフは、1933年にヴェリコ・タルノヴォ県(現・ロヴェチ州)に生まれ、美術アカデミーでは、主にグラフィック・アートを学んだ。1965年の同校卒業後は絵画の分野で制作活動を展開し、内外の美術展で高い評価を得ている。

本作は、昭和53年(1978)にブルガリア人民共和国のトドル・ジフコフ国家評議会議長から贈進されたものであるが、制作年や出品歴等については不詳である。

出品リスト

No	作者名	作品名	分野	サイズ	制作年	贈進年	贈進国もしくは機関
1.	—	ティキ神像	石彫	12.0×7.5	—	1956(昭和31)	ニュー・ジーランド
2.	ロドリゲス	《河祭りの情景》	版画	25.4×40.2	1963	1966(昭和41)	フィリピン共和国
3.	—	紅珊瑚製櫃	珊瑚細工	26.0×42.5×25.0	—	1986(昭和61)	フィリピン共和国
4.	—	貝製食器・櫃	貝細工	(櫃)30.8×55.2×33.2	—	1986(昭和61)	フィリピン共和国
5.	—	花文蒔薔水入れ 一対	漆工	各D. 62.0 H. 58.5	—	1932(昭和7)	旧シャム(タイ王国)
6.	—	天人鳥獣花文洗顔具	金工	D. 14.5 H. 14.8	—	1963(昭和38)	タイ王国
7.	—	舞踊仮面	紙工	H. 62.0、50.0	—	1977(昭和52)	タイ王国
8.	ウ・バ・ニャン	《シュエダゴン・パゴダ》	油彩画	95.0×78.5	1944	1944(昭和19)	旧ビルマ(ミャンマー連邦)
9.	—	トオ(儀式用仮面)	紙工	27.0×27.0 H. 16.5	—	1986(昭和61)	ブータン王国
10.	—	草花文飾壺	金工象嵌	D. 16.5 H. 43.5	—	1985(昭和60)	インド
11.	—	孔雀置物 一対	金工	各H. 49.5	—	1960(昭和35)	ネパール王国
12.	—	仏陀図浮彫宝石箱	牙彫	9.5×14.9 H. 5.2	—	1960(昭和35)	ネパール王国
13.	—	木象嵌宝石箱	木工	20.0×29.3 H. 7.5	—	1985(昭和60)	シリア・アラブ共和国
14.	—	木象嵌刀剣箱	木工	26.5×114.8 H. 8.0	—	1979(昭和54)	OPEC [石油輸出国機構]
15.	—	家族図染綿布	染織	73.0×76.0	—	1981(昭和56)	タンザニア連合共和国
16.	マラバ	風俗図	版画	40.0×46.7	—	1981(昭和56)	タンザニア連合共和国
17.	ロビノ・イティラ	《村人の語らい》	チョーク画	53.2×60.0	1981	1981(昭和56)	タンザニア連合共和国
18.	G.マタンヴェ	樹林動物図彫瓢箪壺	瓢箪彫	D. 34.0 H. 33.0	—	1981(昭和56)	タンザニア連合共和国
19.	ピエール・アサンボ	“生命樹”浮彫	牙彫	D. 15.0 H. 39.0	1967	1971(昭和46)	旧コンゴ共和国 (コンゴ民主共和国)
20.	パタ・ドゥジョボコ	仮面	木彫	15.0×34.0	1952	1968(昭和43)	中央アフリカ共和国
21.	—	女性仮面	木彫	17.0×32.0	—	1968(昭和43)	中央アフリカ共和国
22.	バンギ彫刻家協会	狩猟舞踊図浮彫	牙彫	25.4×40.0	1967	1968(昭和43)	中央アフリカ共和国
23.	パスカル・ルトンボ	女性頭部像	石彫	26.0×16.0×22.5	1978	1978(昭和53)	ガボン共和国
24.	タムシール・ゲイ	《希望》	油彩画	117.0×79.5	1977	1978(昭和53)	セネガル共和国
25.	パパ・イブラ・タル	《楽園の鳥》	染織	191.0×160.0	1979	1979(昭和54)	セネガル共和国
26.	リカルト・マルチネス	《ウアカー古代土器》	パステル画	46.8×62.0	1980	1980(昭和55)	パナマ共和国
27.	ディミタル・カザコフ	《泉のかたわらで》	油彩画	128.5×128.5	—	1978(昭和53)	旧ブルガリア人民共和国 (ブルガリア共和国)

注) 制作年は、明確にできるものだけを記した。

List of Exhibits

1 Image of Tiki deity

Carved stone
12.0 × 7.5
Received in 1956
New Zealand

2 Scene of river festival

By Rodriguez
Print
25.4 × 40.2
Created in 1963, received in 1966
Republic of the Philippines

3 Red coral chest

Coral work
26.0 × 42.6 × 25.0
Received in 1986
Republic of the Philippines

4 Dining utensils and chest made with shells

Shell work
30.8 × 55.2 × 33.2
Received in 1986
Republic of the Philippines

5 Water vessel with flower design in *kinma*

Lacquerwork
D62.0, H.58.5
Received in 1932
Former Siam (Kingdom of Thailand)

6 Wash bowl with design of deities, birds, animals and flowers

Metalwork
D.14.5, H.14.8
Received in 1963
Kingdom of Thailand

7 Dancing mask

Color on paper craft.
H.62.0, 50.0
Received in 1977
Kingdom of Thailand

8 Shwedagon Pagoda

By U Ba Nyan
Oil painting
95.0 × 78.5
Created in 1944, received in 1944
Former of Burma (Union of Myanmar)

9 Ritual mask

Gold on paper craft, glass and so on.
27.0 × 27.0, H.16.5
Received in 1986
Kingdom of Bhutan

10 Vase with design of grasses and flowers

Metalwork and Ivory.
D.16.5, H.43.5
Received in 1985
India

11 Peacocks

Metalwork, coral, turquoise and so on.
H.49.5
Received in 1960
Kingdom of Nepal

12 Jewelry box with relief of Buddha

Carved ivory
9.5 × 14.9, H.5.2
Received in 1960
Kingdom of Nepal

13 Jewelry box with wooden inlay

Woodwork
20.0 × 29.3 H.5.2
Received in 1985
Syrian Arab Republic

14 Sword box with wooden inlay

Woodwork
26.5 × 114.8, H.8.0
Received in 1979
OPEC(Organization of Petroleum Exporting Countries)

15
Cotton cloth with scene of a family

Batik
73.0×76.0
Received in 1981
United Republic of Tanzania

16
Genre painting

By Maraba
Print
40.0×46.7
Received in 1981
United Republic of Tanzania

17
Villagers' talk

By Robino Htila
Chalk picture
53.2×60.0
Created in 1981, received in 1981
United Republic of Tanzania

18
Gourd bottles with carved designs of trees
and animals

By G.Matambwe
Carved gourds
D.34.0, H.38.0
Received in 1981
United Republic of Tanzania

19
Relief of "Tree of Life"

By Pierre Asimbo
Carved ivory
D.15.0, H.39.0
Created in 1967, received in 1971
Former Republic of the Congo
(The Democratic Republic of the Congo)

20
Mask

By Pata Djoboko
Carved wood
15.0×34.0
Created in 1952, received in 1968
Central African Republic

21
Mask of woman

Carved wood
17.0×32.0
Received in 1968
Central African Republic

22
Relief of hunting and dancing

By Bangui Association of Sculptors
Carved ivory
D.25.4, H.40.0
Created in 1967, received in 1968
Central African Republic

23
Woman's head

By Pascal Letombo
Carved stone
26.0×16.0×22.5
Created in 1978, received in 1978
Gabonese Republic

24
Hope

By Tamsir Gueye
Oil painting
117.0×79.5
Created in 1977, received in 1978
Republic of Senegal

25
Bird of Paradise

By Papa Ibra Taal
Textile
191.0×160.0
Created in 1979, received in 1979
Republic of Senegal

26
Ancient earthenware

By Ricaurte Martínez
Pastel picture
46.8×62.0
Created in 1980, received in 1980
Republic of Panama

27
By the Fountain

By Dimital Kazakov
Oil painting
128.5×128.5
Received in 1978
Former People's Republic of Bulgaria
(Republic of Bulgaria)

[謝辞]

本展開催準備にあたり、下記の機関、諸氏に資料提供や調査協力、御教示等をいただきました。記して深く感謝の意を表します。

[Acknowledgment]

Special thanks to the following organizations and people for their cooperation toward the preparation for this exhibition.

外務省

インド大使館
ガボン共和国大使館
タイ王国大使館
パナマ共和国大使館
フィリピン共和国大使館
中央アフリカ名誉総領事館

国立国会図書館
国立民族学博物館
東京外国語大学
東京国立近代美術館
東京国立文化財研究所

国際交流基金
国際交流基金アジアセンター

小田急美術館
世田谷美術館
東京都庭園美術館
東武美術館
福岡アジア美術館
福岡市美術館
アジア・アフリカ図書館
中近東文化センター

秋道智彌
伊東照司
今枝由郎
岩水龍峰
金子量重
兼森省治
川口幸也
金原保夫
串田紀代美
向後紀代美
鐸木道剛
高橋忠久
羽田 昶
松本伸之
山梨絵美子
吉田憲司
ラワンチャイクン 壽子
(順不同、敬称略)

民族のこころと形

三の丸尚蔵館展覧会図録No.20

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成11年1月9日発行

© 1999, Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

Ethnic sprits and Forms

Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Exhibition Catalogue No.20

Edited by Museum of Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Produced by Tokyo Bijutsu
Translated by Hiroko Yokomizo
Issued by Imperial Household Agency
© 1999, Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

民族のこころと形

三の丸尚蔵館展覧会図録No.20

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成11年1月9日発行

© 1999, Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

Ethnic sprits and Forms

Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Exhibition Catalogue No.20

Edited by Museum of Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

Produced by Tokyo Bijutsu

Translated by Hiroko Yokomizo

Issued by Imperial Household Agency

© 1999, Museum of the Imperial Collections